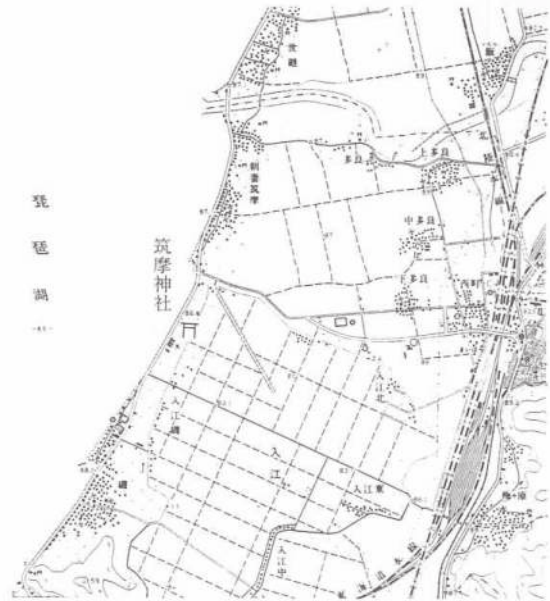


## 58. 筑摩祭

**鍋釜祭** 筑摩祭は米原町朝妻筑摩の集落の南にある筑摩神社の祭礼である。俗に鍋冠祭として著名であるが、これはお旅所から神社までの渡御に狩衣姿の少女が鍋をかぶって行列に加わることからそう呼ばれている。近在では鍋だけでなく、鍋と釜をかぶるので以前は鍋釜祭と称していたのが、いつのころからか鍋冠になってしまったという。8人の少女がかぶる鍋釜をよく見ると、底に小さな突起が3つ出ているのが鍋、何も突起物のないのは釜で、それぞれ4つずつある。しかし行列には鍋釜をかぶった少女だけでなく、さまざまな仮装をこらした人びとが行列をする。それでここではこの祭を筑摩祭とよぶことにする。なぜこのように多くの人びとが渡御に加わるようになったのか、今では行事を主催する村人たちにもその意味が忘れられてしまっているようである。本稿ではその手がかりをさぐりたい。

**氏子圏と神供** 筑摩神社の氏子は朝妻筑摩のうちの筑摩と上多良、中多良、下多良の4字に及び、この4大字によって祭が行われている。朝妻筑摩は湖岸に沿った集落であるが、明治8年朝妻・中島・筑摩の3村が合併して今の名に改めた(滋賀県市町村沿革史)のであって、本来は別々の村であった。そのためか朝妻や中島の人々は筑摩祭に参加しない。筑摩神社は集落から離れていて筑摩の集落内に神社はなく、三多良と総称される上・中・下の多良にはそれぞれ神社があって、朝妻には朝妻神社、中島には中島神社(社伝には朝妻村の南に接し、尚江村と称し、千余戸を有する大村の産土神であったが、正中2年(1325)10月21日夜の地震のため、神社および30余軒を残して全部湖水に水没したため、以後朝妻村と併合したと伝える一近江国坂田郡志)がある。現在では祭日はすべて5月3日に統一されているが、祭日はもともと違っていた。別表のように筑摩神社が5月8日(旧暦では4月8日)、朝妻神社と中島神社は4月26日、上多良神社と中多良神社は5月8日、下多良神社は9月7日である。下多良神社は現在筑摩神社の氏子圏であるが、表のとおり上・中の多良とは祭神も異なる。筑摩神社の祭神は御食津神、大年神、宇賀野魄神で、縁起には「素盞鳴尊娶大市姫、生児大年神及稲倉魂神、即筑摩三所神也」



筑摩神社の氏子圏および神社の一覧表

所在地	神社名		祭日		祭神・その他		
	近江輿地志略	近江輿地志略	近江輿地志略	近江輿地志略			
市町村 米原町	大字 朝妻筑摩	小字 川南 筑摩神社	筑摩大明神社	5月8日	2月初午日、4月8日	市杵島命、御食津大神、大歳神、倉稲魂神、大市比売神	
		中島神社	若宮八幡社	4月26日	3月16日	菅田別命	
		朝妻神社	牛頭天王社	4月26日	3月16日	素盞鳴命	
		稲荷神社				倉稲魂命	
	上多良	小路口 上多良神社		5月8日		大食津神、大年神、大市姫神	
	中多良	西ノ山 中多良神社		5月8日		大食津神、大年神、大市姫神	
	下多良	知前 下多良神社	牛頭天王社	9月7日		素盞鳴命	
	磯	明王 磯崎神社	磯崎大明神社	5月8日	4月8日(古昔正月初亥、4月8日、9月9日 11月21日)	日本武尊 天平勝宝年中勸請	
	梅ヶ原	山敷	六所神社	六社大明神社	5月8日	4月8日	大日靈貴尊、伊勢諾尊、底筒男命、大己貴命、武甕槌命、素盞鳴命、天穗日命
			稲荷神社				不詳
出口			天満天神社 神明社			菅公	
彦根市	甲田	里之内 天神社	若宮八幡社	5月8日	4月8日	久延毘古大神	
近江町	世継	野藪 蛭子神社	世継神社	5月1日、9月17日		須佐男命、事代主命	
		北材木	春日神社	5月1日、9月17日		天兒屋根命	
		宇賀野	神明 坂田宮岡神社	伊勢天照皇大神宮	5月1日		天照皇太神、豊受毘売命
	塚町	宇賀野神社	牛頭天王社			須佐男命	
		岩脇	宮山 稲荷神社	稲荷大明神社	5月5日	4月5日	宇賀魂命 天正2年3月勸請
	飯	居堂	春日神社	春日明神社	5月1日	4月3日	天津兒屋根命、武甕槌命、経津主命、比売神 天正元年4月勸請
			堂之前	八幡神社	八幡神社	5月1日	

とあり、素盞鳴尊と全く無関係ではない。主神御食津神は朝廷の大膳職が祀る食物神である。筑摩は延久2年(1070)まで朝廷の御厨(扶桑略記)として、造醬・鮓・鮓・味塩鮓・塩・醬大豆などを貢進していた(延喜式)。この貢進物からみれば、造醬または醬油を造る塩・大豆のほかは鮓であり、塩は琵琶湖では生産されないから、いずれ塩津を経由して北陸から運ばれてきたものと思われる、むしろ主な貢納物は琵琶湖の鮓、なかでも保存のきく鮓鮓ではなかったか。神社の縁起のなかで祭式に関して、供物は「去歳之霜月十五日、漁、鮓魚、取脩、片鱗、放、海、明年二月巳日網取又脩、片鱗、備、神供、例也」(近江国坂田郡志)とある。つまり、前年の11月15日に鮓をとり片側だけ鱗をはがして湖に放ち、翌年2月巳日に再びその鮓を網でとり、もう一方の鱗をはいで神供とするのが恒例になっているというのである。大変手のこんだ鮓のとり方をするものだが、それには何か重要な意味があったのだろう。ちょうど鮓鮓を作るとき、鱗をはいで塩切りし、再びそれをとり出して水洗いして鱗が残っていればそれもきれいにとり、もう一度ご飯で漬けなおすこととどこか似ている。同様の記事が近江輿地志略の磯崎神社の項にもみえる。「祭礼毎年四月八日。(中

略) 往古は四月七日に湖水に網を下し鮓魚二を得、一を神供に奉り、一は片鱗をとりて湖中へ放つに必然翌年四月七日の網に此魚を得といへり。然れども時移り世かはりて祭礼もやみ、漸く四月八日の祭礼のみぞ行はるる。ここでも前年片鱗をはがして放流した鮓を翌年再びとり、もう片方の鱗をとって供えるというのである。

筑摩社並びに七カ寺の絵図 ところで、筑摩には南都興福寺派下近江国坂田郡筑摩社並七カ寺之絵図が伝存されている。正応4年(1291)に画かれた絵図を文明6年(1474)に模写し、興福寺龍雲院が所蔵していたのを借用して承応2年(1653)に模写、さらにこれを乙亥年(文化12年(1815)カ)に藤原胤政が写したものである。乙亥年が何年にあたるか不明であるが、承応以後江戸時代に乙亥は3度あり、絵図の模写が正応からほぼ200年ごとに行なわれ、後述するように幕末のこの時期に社殿の修築や祭礼の再編が行なわれているふしがあるので、文化12年ではないかと推測する。絵図に興福寺派下とあるのはこの地がもと興福寺領であったため、正応4年に画いたものを3度まで正しく模写しているとすれば、ここに描かれた諸村は筑摩神社の氏子圏ということになる。図中の村名を列記する





筑摩社並びに七ヶ寺の絵図

と、筑摩には筑摩とは別に「筑摩の内」として神社の両側の湖岸に現存しない神立、西邑の2村があり、他は磯・朝妻・世継・宇賀野・岩脇・飯邑・北ノ多良・上ノ多良・多良中村・多良浜邑と米原町から近江町に及ぶ地域が含まれている。すでにこれらの大半の村は現在筑摩神社と関係をもたないが、近江輿地志略には同社を上中下の多良村、梅原村、甲田村は産土神とすとあり、坂田郡志には12の末社を建立して大に神境の規模を拡大したという。そこで筑摩祭の変遷を知る手がかりとして、絵図中に現在との相違点をあげると次のようなことである。

1. 参道奥の鳥居とは別に東西南北に4つの大鳥居がある。
2. 御旅所が宇賀野にある。
3. 神木柳と書いた枝垂柳が筑摩神社・宇賀野・岩脇の3ヶ所に描かれている。
4. 絵図の7ヶ寺はすべて現存しないが、図中の社寺の向きが正しいとすれば、筑摩神社と同じく西面するのは筑摩の今江寺だけである。しかし現在の社殿は南面して建っている。
5. 筑摩の内に西邑、神立という村がある。これについてはすでに述べた。

以上の点について順次検討を加える。まず鳥居については現在も湖岸に西面する石造鳥居があり、祭礼の行列は湖岸道路の交通事情もあって社殿西側の参道を通ってくるが、いったん西の鳥居からはいりなおして本殿に向かう。絵図では朱塗の鳥居が神社の四方に立ち、特に西面の鳥居は大鳥居と称し、まったく湖岸にあって、大馬場先六町とあるから現在とはかなり西につき出した地形で、湖岸べりは石積がしてあり、湖水へは石段が設けられまっすぐに本殿へ向かう参道が通じている。南の鳥居は磯との境、東の鳥居は多良の東北の鳥居は朝妻と筑摩との境にある。この4つの鳥居に囲まれた地域が現在の氏子圏で祭礼に参加していることになる。また南北の鳥居の両脇には垣が組まれているのがわかる。

次に御旅所は現在、筑摩の集落内にある神輿の蔵があてられ、行列の衣装などもそこに納められてあるが、図中の全域が氏子圏に属するとみなされる大きな理由のひとつは、御旅所が今では神社と何の関係もない宇賀野にあることである。宇賀野には7ヶ寺の学頭をつとめる大歡喜光寺や宇賀魂社、天照大神が伊勢に遷座する途中、甲可日雲宮から遷幸してきたと伝える坂田宮岡神社が描かれている。御旅所そのものの絵はみえ



ないが、寺の東側に位置したらしく、そのそばに神木柳がある。

3に柳が神木であることを今では氏子達はあまり意識していない。しかし京都の賀茂の祭を葵祭とよぶならば、筑摩の祭を別に柳の祭と称してもよいのではないかと思う。というのは、祭礼のとき先頭を歩く猿田彦は柳の枝をもち、筑摩神社と現在の御旅所に立てる幟棹の先には柳枝の束がくくりつけられてある。文亀元年に画いた行列絵巻を承応2年に写した筑摩祭行列図には猿田彦は柳枝をもっていないが、権神主と神楽乙女の頭上、および権神主にさしかけた傘の先には枝垂柳らしきものが描かれている。いずれにせよ柳が神木として重視されていたことは、筑摩の縁起に、「筑摩四町四面柳樹森也。於中長三十丈、柳樹上奇雲覆放<sub>二</sub>靈光<sub>一</sub>。天皇感<sub>二</sub>奇之<sub>一</sub>、祭<sub>三</sub>神於柳樹下<sub>一</sub>、始行<sub>二</sub>祭礼<sub>一</sub>。二月午日及四月八日也。古昔三社薨並巍々焉。柳森西限<sub>二</sub>大湖<sub>一</sub>去<sub>二</sub>浜八町<sub>一</sub>、東内江、南到<sub>二</sub>磯際<sub>一</sub>、北朝妻橋為<sub>二</sub>界<sub>一</sub>」(近江輿地志略)とあることから筑摩祭が柳の祭であることは明らかである。往時は筑摩神社の境域はほぼ柳樹で覆われていたことになる。さて絵図にもどって、3ヵ所に神木柳が描かれた理由は不分明ながら、坂田宮岡神社の社伝に「坂田宮、岡神社は孝安天皇の御宇、宇賀野魂命降臨し給ひ、五穀豊饒を守護し給う。同時に筑摩村に御食都神、岩脇村に大歳神降臨し給うとて、此の三神を筑摩三所の神と称すと言う」

(坂田郡志)。また筑摩神社の配布した筑摩神社由緒略記にも祭神御食津大神、相殿大年神・宇賀野魂神とあることから、神木は三神降臨の地と伝承する所と関係があるように推測される。さらに歓喜光寺は別に柳光寺といい、筑摩の今江寺を柳光山という(坂田郡志)のも理由のないことではあるまい。今では神社に一本の柳樹もなく、筑摩の近辺の池畔や川端にわずかに残るにすぎず、これが往時をしのばせている。

4に図中の社寺の向きであるが、これは北を除く南東西と西北の四方に面するよう描いてあり、たんに図中の余白の都合からでたらめに画いたとは思えない。主要な堂門・社殿が東面するのは歓喜光寺・光福寺(郡志では興福寺)・本願寺・坂田宮で、歓喜光寺の門だけは南に向いている。南面するのは法性寺・蘭華寺、西面は今江寺・筑摩神社、西北は護寧寺・磯崎社である。7ヵ寺は今江寺を除いて境内もしくは付近に神社を有するが、寺社が同じ方角に面しているのは世継光福寺・上多良本願寺・中多良蘭華寺・岩脇護寧寺で、法相宗の寺(歓喜光寺・光福寺)が東面する以外に法則性を見い出せない。また7ヵ寺中、兼宗も含めると今江寺をはじめ4ヵ寺が真言宗で、護寧寺が天台兼宗であるのを除いて他は南都系の仏教で、7ヵ寺は広く真言宗の色合いを帯びていたと思われる。7ヵ寺は滅亡して既になく(祭礼のとき多良の宿となる今江寺も名ばかりで盛時のおもかげはない)、その痕跡としては、上多良にある木造薬師如来像(重文・平安)が本願寺の本尊ではなかったかと推測されるにすぎない。

絵図の筑摩神社の社殿は現在と向きが異なるが、古文書によると文化年間に大きく修築がなされている。このとき渡御の衣装・諸道具なども新調され、同時に多少変化して祭礼が大きく復興した時期ではないかと思われる。嘉永3年には藩主井伊直亮の上覧もあり、その際に祭礼行列絵図が画かれた。社殿の向きがその時に変わったかどうかは断言できないが、神社と祭礼が何度か衰退と再興を繰り返してきたなかで、江戸末期が一画期であったことは容易に推測される。

(長谷川嘉和)



幟棹の先の柳枝



柳枝をもつ猿田彦